

小学校飼育動物の健康管理に対する指導のための 動物飼育に関するアンケート調査

西村和彦

(大阪府立大学農学部獣医学科獣医疫学講座)

Questionnaire surveies of health care of animals kept in elementary schools contributing to veterinarian

Kazuhiko NISHIMURA

(Department of Veterinary Epidemiology, College of Agriculture, Osaka Prefecture
University 1-1, Gakuencho, Sakaishi, Osaka 599-8531, Japan).

要 旨

小学校飼育動物の健康管理に獣医師が携わる場合において、注意を払うべき事項を明らかにし、よりの確な指導の参考とするために、飼育動物担当教員の衛生、飼養管理に対する意識について調査した。調査は平成9年、10年の2回、電子メールによるアンケート調査により行なった。飼育動物の種類はウサギおよび鶏、チャボ等の家禽が半数以上を占めており、情操教育を主目的として飼育されていた。動物を飼育していた小学校の56.9%では飼育環境に何らかの問題があると回答した。動物を飼育していた小学校の60.4%が児童の衛生に対して特に配慮を行っている一方、動物の衛生に関して配慮を行っているのは32.6%であった。これらの結果から動物飼育において児童の衛生への関心は高いが、それに関わる動物の衛生、飼育管理に対する意識の低いことが明らかになった。

キーワード：：動物、小学校、衛生

Abstract

Questionnaire surveies about health care of animals kept in elementary schools were performed using e-mail in 1997 and 1998. The present surveies aimed at being useful for veterinarian contributed health care of animals kept in elementary schools. Rabbits and domestic fowls were the most common kinds. In 56.9% of the respondent schools, they answered that the animals were kept in a poor environment. The especial attention to sanitary conditions for students was paid in 60.4% of the schools, and the sanitary attention for animals was 32.6%. These results suggest that only schools has been interested in the hygiene of animals and zoonosis.

Key Words: animals, elementary school, hygiene

緒 言

多くの小学校において動物が飼育され、情操教育や理科教育に利用されている。獣医師にとってこれらの飼育動物は、傷病への対応のみならず、動物愛護や動物福祉を啓発していく上で重要な対象である。また家畜防疫の立場から家畜保健衛生所による小学校等での飼育動物に関する調査が行

われている(田中ほか, 1996)。獣医師が飼育動物の健康管理に携わる場合、動物に身近に接している生徒とその指導を行う教師の動物飼育に対する認識や知識、技術、小学校という条件による制約等を正しく把握する必要がある。特に衛生管理は飼育動物の健康を守る上で最も重要な点である。そこで、飼育動物の健康管理に関わる場合に獣医

西村：小学校の動物飼育に関するアンケート調査

師が注意を払うべき事項を明らかにし、獣医師がよりの確かな指導を行うために、小学校における飼育動物担当者の衛生、飼養管理に対する意識についてアンケートにより調査した。

方 法

平成9年8月時点で、公式ホームページを確認した全国の小学校436校、および平成10年9月時点で公式ホームページを確認した764校に対して電子メールによりアンケート調査を実施した(辻ほか, 1987)。アンケート項目を表1に示した。調査依頼は飼育動物担当者宛としたが、実際の回答者については各機関の判断に任せた。

成 績

平成9年および平成10年の両調査で、動物を飼育している小学校130校および197校から回答があり、回収率はそれぞれ29.8%および26.0%であった。平成10年調査のうち31校が平成9年と10年の両方とも回答した。回答はすべて飼育動物を担当している教員から得られた。

平成9年調査において飼育動物の種類はウサギ、

表1 平成9年および10年アンケート調査項目

平成9年調査項目	
Q1	貴校では動物を飼育していますか？ 1. はい 2. いいえ 3. 現在は飼っていないが飼う予定がある、あるいは飼ってみたい。
Q2	貴校で飼育されている動物の種類と数を記入してください。 (記入例 鶏-20、兎-5)
Q3	動物の世話をするのは誰ですか？ 1. 児童 2. 教師 3. その他
Q4	動物を飼育している環境をどう思われますか？ 1. 良いと思う 2. 少し問題があるが仕方がない 3. 良くないと思う 4. 悪いので改善したい 5. 良いのかどうかわからない 6. その他
Q5	糞尿の処分はどのようにされていますか？ 1. 肥料として利用 2. ごみとして処分 3. 誰かが持って帰る 4. 何もしない 5. 処分に困っている 6. その他
Q6	動物の病気やけがの子防に何かされていますか？ 1. 定期的に投薬する 2. 関心はあるがやり方がわからない 3. 何もしない 4. その他
Q7	どのような目的で動物を飼育していますか？、あるいは飼育したいと考えておられますか？
Q8	人畜(人獣)共通感染症(ズーノーシス)と言う言葉を御存知ですか？ 1. 知っている 2. 初めて聞いた
平成10年調査項目	
Q1	人獣共通感染症と言う言葉をご存知ですか？ 1. 知っている 2. 初めて聞いた
Q2-1	動物を飼育する上で児童に対して衛生上の配慮、指導を特にしておられますか？ 1. している 2. 特別にはしていない
Q2-2	しておられる方は具体的にどのような配慮、指導をなさっていますか？
Q3	動物の健康を維持するためにどのようなことに気をつけておられますか？ 1. 特に何もなくても動物は健康である 2. 病気や怪我が起こってから対応する 3. 日々の清掃で十分である 4. 餌や飲水の管理 5. 投薬や注射による病気の予防 6. 時々、消毒おこなっている 7. その他(具体的に書き下さい)
Q4-1	動物の衛生管理に特に注意を払っていることはありますか？ 1. 特にない 2. ある
Q4-2	ある方は具体的に書き下さい。

アンケートは電子メールによって実施した

インコ、ニワトリ、チャボ等が主であった(表2)。動物の飼養管理は生徒と教師の両方で行う学校が68.8%、生徒が行うところが28.1%であり、飼養管理の主体は生徒であった。平成9年調査において動物飼育の目的は74.6%が動物への、または動物を通して人間への「愛護」、「思いやり」、「命の尊さ」等の情操教育と回答した(表3)。「飼育する責任」、「勤勉、誠実な世話、労働」等、道徳教育として動物を飼育する上での責任や義務について回答の中で明確に触れていたのは9.0%に過ぎなかった。生産物の利用という人間による動物の利用について触れていたのは僅かに1校(0.8%)であった(表3)。

「人獣共通感染症」という名称を知っているかという質問に対して、平成9年調査では11.9%が

表2 回答した小学校における飼育動物の種類と飼育数¹

種類	飼育校の割合 ² (%)	飼育数		
		最大	平均	中央値
ほ乳動物	75.0			
ウサギ	70.6	20	7	5
その他	16.7			
鳥類	71.2			
ニワトリ	41.2	20	6.8	5.5
チャボ	11.8	21	7	5.5
インコ	19.1	23	10.6	7
その他	29.4			
魚類	22.1			
その他	16.2			

1：平成9年調査

2：回答した小学校総数に対する各動物を飼育していた学校数の割合を示した。

表3 質問：「動物を飼育する目的はなにか」に対する回答¹

分類 ²	割合 ³ (%)
情操教育のため (愛護、思いやり、命の尊さ等)	74.6
生活科で利用	30.0
理科教育のため (生命の神秘、飼育技術等)	10.0
道徳的な教育のため (飼育する責任、勤勉誠実な世話、労働等)	9.0
生産物の利用	0.8

1：平成9年調査

2：記述による回答のため各項目とカッコ内の言葉を含む回答を適合するものとしてカウントした。

3：複数回答のため回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

表4 質問：「人獣共通感染症という名称を知っているか」に対する回答

分類	割合 ¹ (%)	
	平成9年	平成10年
人獣共通感染症という名称を知っている	11.9	47.5
初めて聞いた	88.1	52.5

1：回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

知っているが、平成10年調査では48.2%に増加した(表4)。

平成10年調査において飼育動物に関わる児童に対して衛生上特別に注意を払っているのは60.4%であり、その内84.7%が手洗いを励行していた(表5)。しかし動物の取り扱いに関して注意を払っているのは7.1%、動物舎内に入る時には靴を履き替えたり、出るときには靴の裏を良く洗うなど、飼育環境衛生に注意していたのは8.2%にすぎなかった(表5)。

平成10年調査において動物に対して衛生上特別に注意を払っているのは32.6%であり、その内58.7%が動物舎の清掃を挙げている(表6)。平成9年調査において飼育環境について何らかの問題があると考えているのが56.9%であり、改善を検討しているのは18.5%であった(表7)。しかし糞尿の処理に問題を抱えているところは1.5%に過ぎなかった(平成9年調査)。動物の健康管理に関して、平成9年調査において疾病等に対する予防措置を行っていたのは4.6%であり、関心を持っていたのは37.7%

表5 質問：「児童に対して衛生上の配慮、指導を特にしているか」に対する回答¹

分類	割合 ² (%)
特別に配慮していない	39.7
特別に配慮している	60.3
指導内容 ³	
手洗い	84.7
うがい	15.3
靴底を洗う、専用の靴に履き替える	8.2
動物の取り扱いへの注意	7.1
食べ物との接触をさける	5.9
その他	21.4

1：平成10年調査

2：回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。指導内容の割合は複数回答のため特別に配慮していると回答したすべての小学校に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

3：記述による回答のため各項目の言葉を含む回答を適合するものとしてカウントした。

表6 質問：「飼育動物に対して衛生上の配慮、指導を特にしているか」に対する回答¹

分類	割合 ² (%)
特別に配慮していない	67.4
特別に配慮している	32.6
実施内容 ³	
畜舎の清掃	58.7
獣医師による指導	10.9
毎日の観察	10.9
栄養管理	6.5
疾病の予防処置	6.5
その他	17.4

1：平成10年調査

2：回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。実施内容の割合は複数回答のため配慮していると回答したすべての小学校に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

3：記述による回答のため各項目の言葉を含む回答を適合するものとしてカウントした。

であった(表8)。平成10年調査において動物の健康維持のための注意点について、73.8%が餌や飲水の管理を挙げたが、日々の清掃を挙げたのは34.8%であった(表9)。また傷病が発生してから考えると回答したのが31.2%であり、予防措置を行っているのは3.6%であった(表9)。

考 察

平成9年と10年の2回の調査より「人獣共通感染症」という名称を知っている割合は1年間に2倍以上に増加しており、認識は高まっている。同時に飼育動物に関わる児童に対する衛生には6割が特に注意を払っており、衛生に対する意識は高いと考えられる。手洗いは有効性も高く(Master *et al.*, 1997)、平成10年調査において回答のあった小学校の5割が指導していた一方、靴等からの汚染を防ぐといった飼育環境の衛生に対する配慮は

表7 質問：「動物を飼育している環境をどう思うか」に対する回答¹

分類	割合 ² (%)
良い	35.4
問題があるが仕方がない	36.9
良くない	1.5
悪いので改善したい	18.5
良いのかどうかかわからない	6.2
その他	1.5

1：平成9年調査

2：回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

表8 質問：「動物の傷病の予防に何かしているか」に対する回答¹

分類	割合 ² (%)
定期的に行なっている	4.6
関心はあるがやり方がわからない	27.7
何もしていない	55.4
清掃等	4.6
その他	7.7

1：平成9年調査

2：回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

表9 質問：「動物の健康を維持するためにどのようなことに気をつけているか」に対する回答¹

分類	割合 ² (%)
飼料、飲水の管理	73.8
日々の清掃	34.8
傷病が発生してから対応	31.2
何もしなくても健康	9.9
消毒	4.3
投薬等による予防	3.6
その他	2.1

1：平成10年調査

2：複数回答のため回答した小学校総数に対する各項目を回答した学校数の割合を示した。

低い結果であった。これは動物の衛生管理に対しては3割の小学校しか特に注意を払っていない事と併せて、動物の飼育環境の衛生管理が児童の衛生を守る上で大切であるという認識があまりなされていないためと考えられる。さらに動物の衛生管理は動物の健康を維持する上でも重要であるが、健康維持に関して飲水や飼料に対する注意を払うという回答が7割を越えるのに対して、清掃を回答したのは3割程度に過ぎなかったことは動物を飼育する環境が健康管理に重要であるという認識に欠けていることを裏付けている。

児童の人獣共通感染症が畜産農家への訪問によって発生したことが報告されている (Dawson *et al.*, 1995, Pritchard *et al.*, 1995, Shukla *et al.*, 1995) が、幸いなことに現在のところ小学校の飼育動物から感染したという報告はない。しかしウサギ等からの人獣共通感染症の危険性は指摘されており (Chomel *et al.*, 1992)、より密接な接触をする子供には一層の注意が必要である (Chomel *et al.*, 1992)。小学校指導書 (文部省, 1988) には動物への思いやり、理科的側面、体験すること自体を動物飼育の目的として取り上げられており、回答においても情操教育への利用が最も多かった。しかし、小学校指導書 (文部省, 1988) には動物を飼うことの責任や義務に関する明確な記述はなく、適切な飼養管理を行うことが動物愛護の一側面であることが認識されにくいと思われる。

児童が飼育管理の主体であり、飼育管理担当者の児童も教員も次々変わっていくことや、飼育数が多く、飼育密度が過密であることが懸念される小学校もあること、また飼育環境について35.4%しか「良い」とは答えていないこと等、飼育環境や飼養管理に問題を生じやすい状況があると予想される。衛生管理を含めた飼養管理の不手際は動物の傷病の原因となることから、こまめな清掃といった普段の適切な飼養管理も傷病の予防には大きな意味を持つ。しかしこのことを明確に回答していたのは僅かであり、普段行なっている清掃等の衛生管理が動物の疾病予防に重要であることを再認識させる必要がある。小学校の飼育動物においては、適切な飼養管理を行う必要があることへの理解が乏しく、またその技術にも欠けている場合が多いと考えられるので、基本的な飼養管理技

術が特に重要である。抵抗力の低い子どもに人獣共通感染症を発生させないためにも良好な衛生状態で飼育することは重要であり、的確で効率的な衛生管理を行ない傷病の予防に努めることは傷病の治療に伴う経済的な負担を減らし、動物と子供たち双方に利益がある。これは獣医師が積極的に関与すべき事項であり、獣医師という専門家によるアドバイスがあればより良い、現実的な対応が可能になるケースも多いと予想される。

良好な衛生環境で飼育動物の健康を維持管理ができてこそ、情操教育や理科教育が実現するのであり、日々の適切な管理によって動物を健康に飼育するという実践自体を通して動物愛護、動物福祉が推進できる。特に未来ある子供たちに動物に対する正しい考え方を身につけてもらうことは獣医師にとって大切なことと思われる。

謝 辞

ご助言いただいた京都女子大学附属小学校 多川 充先生に感謝します。

引 用 文 献

- Chomel, B.B. 1992 Zoonoses of house pets other than dogs, cats and birds. *Pediatr. Infect. Dis. J.*, **11**, 479-87.
- Dawson, A., Griffin, R., Fleetwood, A., Barrett, N.J. 1995. Farm visits and zoonoses. *Commun. Dis. Rep. CDR. Rev.*, **5**, R81-86.
- Master, D., Hess Longe, S.H., Dickson, H. 1997. Scheduled hand washing in an elementary school population. *Fam. Med.*, **29**, 336-339.
- 文部省 1998. 小学校指導書 生活編. 文部省.
- Pritchard, G.C., Fleetwood, A.J. 1995. Cryptosporidiosis and farm visits. *Vet. Rec.*, **136**, 179.
- Shukla, R., Slack, R., George, A., Cheasty, T., Rowe, B., Scutter, J. 1995. *Escherichia coli* O157 infection associated with a farm visitor centre. *Commun. Dis. Rep. CDR. Rev.*, **5**, R86-90
- 田中英次, 富松洋 1996. 平成7年度全国家畜保健衛生業績抄録 動物用生物学的製剤協会, 12
- 辻新六, 有馬昌宏 1987. アンケート調査の方法. 朝倉書店

(2000年1月14日受領; 2000年2月19日受理)